

上田 薫  
画家

写真と見まがうほどに緻密に描く  
「スーパーリアリズム」で一世を風靡した、画家・上田薫。  
彼のアトリエは、まぶしい緑に囲まれた、  
鎌倉の小高い丘の上にある。

撮影 永野雅子

部屋に足を踏み入れた瞬間、すがすがしい風が吹き抜けた。窓の外には青々とした鎌倉の山が見え、遠くには鶴岡八幡宮が望める。「子どもの頃から自然が好きでね。ここにアトリエを構えたのは、そんな理由からなんです」。真っ白なエプロンを身につけた上田さんが、にっこり笑った。

——清潔感のあるアトリエですね。ずっと鎌倉にお住まいなのですか。

**上田** ここは4つ目のアトリエです。大学で教えたりもしていましたから、そのときの職場が近いところを転々と。僕は人生なりゆきだと思っていますから、先のことを考えないんです。自宅は8軒も建てました。無駄なことをしたもんだなと思いますよ。でも、美術そのものが無駄なものでしょう（笑）。無駄があってもいいんです。

アトリエは、それなりに整理していますね。僕は「きれい」なのが好きなんです。油絵の具がベトベトし

て汚いのは苦手。作品も同じで、きれいなものを描いています。

——上田さんの作品は「スーパーリアリズム」と呼ばれますが、写実的な絵を描かれるようになったきっかけはなんだったのですか。

**上田** 大学を出てからずっと抽象画を描いていたんですが、あるとき行き詰まってしまって。それで、「とにかく見たままに描いてみよう」と、黒いテーブルに置いてある貝殻を写真のように描いてみたんです。でも、どこかもの足りなかった。

そこで、12号サイズ（60.6cm × 50cm）のキャンバスに、貝殻を宙に浮かせたように大きく描いてみたんです。図鑑みたいだね。それを見たときに「あっ、おもしろいな」と思った。僕は大事な絵は描けないけれど、この絵で「これは貝である」と伝えられる。それも、ただ伝えるんじゃないかって思ったんです。

——確かに上田さんの絵は、一瞬、写真のように見えますが、写真よりも強烈な印象を与えます。

**上田** それは、描いた「モノ」としての迫力じゃないでしょうか。写真という印画紙ではなく、キャンバスに絵の具を塗った「モノ」に、人は迫力を



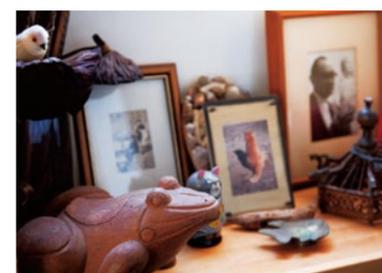
感じるのかな。僕がどんなに緻密に描いても、写真の10分の1ぐらいの情報量しかありません。でも、それが人間の目にどう映るかは別問題。情報がすぎると、見えなくなるものもあると思うので。

——今回、『美術2・3上』の表紙に、「ジェリーにスプーンC」が掲載されています。上田さんは「ゼリー」「生卵」「水の流れ」など、みずみずしいモチーフを描かれることが多いですね。

**上田** みずみずしさというより、僕は「光るもの」が好きなんですよ。

光っているのを見ると、単純に「きれいだな」と思う。

僕の作品を見て、みなさんはいろいろな解釈をしてくれるでしょう。でも、僕自身は何も考えていないんです。「ああ、きれいだな」と身体で感じたものを、ただ描いているだけ。芸術論のようなものは好きじゃないから、難しく考えずに、ストレートにきれいだと思ったものを描く。描き始めたら、お坊さんが写経しているような気分ですよ（笑）。だからね、こういう自然が多くて、静かなアトリエが僕には合っているんです。



壁際には、インドネシアで買ったお土産が並ぶ。旅先で絵のモチーフに会おうことも多いそうだ。



自然光がたくさん入る解放感のあるアトリエで、自由闊達に話す上田さん。



現在制作中の作品。「最近、生命力を感じるものにひかれます」。



うえだ・かおる  
1928年東京都生まれ。  
東京藝術大学油画科卒業。  
グラフィックデザイナーとして活躍し、  
デザイン会社を設立。  
70年に描いた「貝殻」をきっかけに、  
「スーパーリアリズム」と  
呼ばれる写実的な画風で  
世に知られるようになる。